

「死の陰の谷を行くときも」

吉田真司

ジョン・バニヤン『天路歷程』より——主人公の名は「クリスチャン」。この物語のはじめ、彼はまだキリストを知らない者として登場します。彼が住んでいる町の名は「滅びの町」、そして彼はその背中に大きな荷物を背負っています。その荷物は「罪」を象徴しています。彼はその重荷からの救いを求めて、その重荷を背負ったまま旅に出るのです。彼は本を熱心に読みながら歩きます。その熱心さに彼の真剣な求道心が表れています。◇あるとき「福音者 (エバンジェリスト)」という名の長老に出会い、行くべき方向を示されます。「福音者 (エバンジェリスト)」はこう言います。「あの光をじっと見つめて、その方向に行きなさい。そうすれば、わたしの言った門に着く」と。しかし彼を引き留めようとする存在もいます。彼らの名は「カタクナ」そして「イイカゲン」。それは、彼の背負っている「罪」ゆえの心の声のようでもあります。そのカタクナさやイイカゲンな声に心を惑わされながらも彼は旅を続けます。◇途中「ヨワタリ」という名の者に出会って間違った道に迷い込もうとします。「ヨワタリ」、つまりこの世をどう上手く生きて行くか、という人間の欲望が邪魔をする、そんな場面です。するとそこに再び「福音者 (エバンジェリスト)」が現われて彼をたしなめるのです。彼が持っている本にはこう書いてありました。「その門にいたる道はせまい」と。——そう、その本とは『聖書』だったので。そしてその言葉の通り、主人公の求める道への探求は簡単ではありませんでした。広い道、すなわち人間の欲望のままに歩む生き方への誘惑をくぐり抜けながら、彼はやがて一つの丘にたどり着きました。その丘には十字架が立っていたのです。その十字架の影が彼の上に落ちたとき、彼の背中の重たい荷物が滑り落ちました。彼は十字架を見つめただけで、その重荷、つまり罪の重荷から解かれ、大変心が軽くなったのです。そしてここにおいて、彼の名前が本当の意味で彼のものとなりました。そう、クリスチャンという名が、です。◇でも、それが彼の人生の終点ではありません。そこからクリスチャンとしての人生が始まりました。・・・続きは宣教で

教会の定例集会

主日礼拝	日曜日	午前 9:00~10:00 (相模原礼拝)
		午前10:40~12:00 (会堂礼拝)
教会学校	日曜日	午前 9:30~10:20
(嬰兒、幼児、小学生、中高生、青年、成人、英語、聖書入門の各クラス)		
祈り会	水曜日	午後 7:30~9:00
金曜集会	金曜日	午前10:30~12:00
家庭集会 (相模原)	第二火曜日	午前10:00~12:00 (竹村家)
(すずかけ台)	第三木曜日	午後 1:30~3:00 (長谷川家)

日本バプテスト相模中央キリスト教会

〒242-0007 大和市中央林間4-24-6 TEL&FAX046 (274) 3708

牧師：吉田真司 音楽・子どもユース担当主事：江原美歌子 協力牧師：斎藤剛毅

<http://www.sccc.sakura.ne.jp>